

# 幼児の社会的・感情的発達に関する研究 (Ⅲ)

—感情的発達を中心に—

大坪治彦・島田俊秀・松田君彦

(1984年10月15日 受理)

Research on the Social and Emotional Development  
of Young Children (III): Emotional Development

Haruhiko OHTSUBO, Toshihide SHIMADA and Kimihiko MATSUDA

## はじめに

幼児期における感情の発達を考えてみると、それは、情緒が次第に分化していく過程として捉えることができる。もちろん、生後数日の新生児でさえ、口元の筋肉が動いて「ほほえみ」を見せる。しかし、これは快感等の情動に基づくものではなく、間脳や脳幹部位の自発的興奮に対応した一種の生物学的反射にすぎないと言われている。Bridges (1932) によると、その分化の端緒は、生後1ヶ月位であり、2歳頃までに、快、不快、怒り、嫌悪、恐れ、得意、大人への愛情、子どもへの愛情、喜び、嫉妬などが一応分化を完了して、働くようになるとされている(図-1参照)。

この諸感情、いわゆる情緒は、子どもの発達において非常に重要な役割を演じている。情緒は、人間の活動を促進したり、抑制したりする、原動力となるものであり、パーソナリティに関わるすべての発達には、この情緒的経験を伴うのである。

インドで発見された狼に育てられたという8歳の女兒は、ともに生活してきた2歳の女兒が死亡したとき、悲しむことも知らず、泣きもせず、涙も出していない(Singh & Zingg; 1942)。また、発達過程で適切な感情的経験が不足すると、ホスピタリズム(hospitalism; 施設病)などの障害が生じ、行動面で種々の不適応が生じてしまうことも、よく報告されてきたことである。

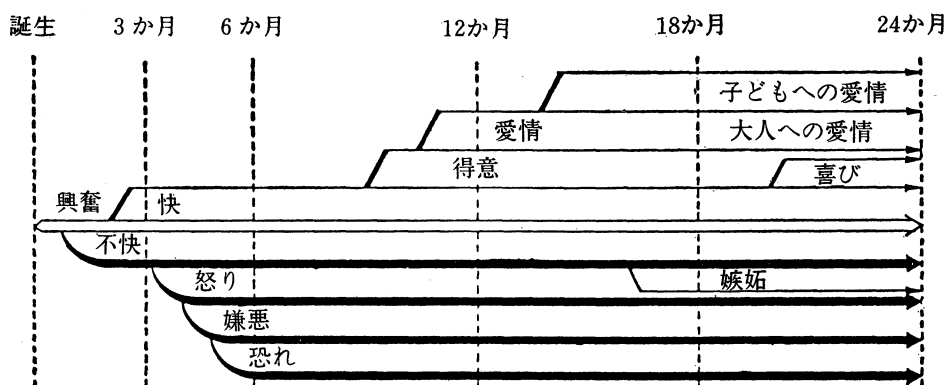


図-1 2歳までの情緒の分化

(Bridges; 1932に基づいて作製:「図説児童心理学事典」高野・林; 1975より引用)

このように情緒は、人間の行動の動機づけの核とも言うべきものであり、幼児における情緒の適切な分化は、人の精神発達にとって、もっとも重要な機能の一つである。

さらに、幼児期においては、これら喜怒哀楽の感情が分化し、より豊かになっていくということだけでなく、これら自分の感情を適切に自分で統制できるようになるということも大切な目標となる。たとえば、自分の思い通りにならないと、かんしゃくを起こすというようなことは、子どもの発達に伴って次第に少なくなることが期待されよう。

このように、幼児期における感情の発達を検討することは非常に重要なことであると考えられるが、これまで、「感情」が、たとえば幼児教育の課題として積極的にとりあげられることは少なかつたと言える。幼児教育では、絵画や音楽といった技能、言葉、遊び、集団生活への適応、社会性、基本的な生活習慣、危険の認知といった項目によって子どもが評価され、これらの活動の基礎的要因となるべき「感情」が、評価あるいは指導の対象として積極的に論議されることは稀である。実際、幼児の発達検査として全国で広く使われているいわゆる「遠城寺式発達検査」や「津守式発達検査」のいずれも、その評価対象の領域中に「感情」あるいは「情緒」が存在せず、「社会性」「対人関係」の中に、感情に言及する質問項目がいくつか含まれているに過ぎない。

本調査は、上述の現状が、感情面の発達様相の理解不足から招来しているものと考え、幼児期におけるその感情面での発達の様相を明らかにすることを基本的な目的としているが、本論文は、われわれの調査研究の第1報として、その結果の概要について報告するものである。

### 調査方法・調査対象・調査時期・質問項目

詳細は、前掲の論文(島田・松田・大坪; 1985: 『幼児の社会的・感情的発達に関する研究(Ⅰ)——方法論を中心に——』)を参照されたい。感情に関する質問項目は、大項目、小項目合わせて96項目、領域は、喜悅、愛情、不機嫌、嫌い、怒り、恐怖、過敏、恥ずかしがる、嫉妬、くやしがる、さびしがる、悲しがる、よく泣く、の計13領域であり、回答はすべて、「いつも」「ときどき」「ほとんどない」の3件法である。前掲の論文で述べたように、男児1,530人、女児1,448人の計2,998人の幼児が調査対象であり、年齢構成は、6歳942人、5歳922人、4歳661人、3歳442人、2歳19人、不明12人であったため、本論文では、このうち2歳と不明を除いた2,967人の幼児について集計を行った。

## 結 果

### 1. 感情の発達に関する分析

本論文では、前述の13の各領域について、その代表的な質問項目に対する調査結果を図示しながら概略を述べる。なお、年齢による差の検定に $\chi^2$ 検定、園と親との差の検定にはサイン検定を用いている(資料参照)。

### (喜 悦)

「喜ぶ」とか「嬉しそうにする」といった感情に関する質問項目である。図-2に「よくできたとき、ほめてもらったとき、うれしそうにしている」という項目に対する集計結果を示す。 $\chi^2$  検定では発達に伴う差は見られない(園での場合、 $\chi^2=6.343$ ,  $df=6$ ,  $p>0.05$ )。

この喜悦の感情は、図-1に示したように、Bridges (1932)ではもっとも遅く分化する情緒であるとされているが、図-2に示したこの項目だけでなく、喜悦に関する項目のほとんどで大きな差は見られず、全体として、3歳から6歳の間は発達に応じて顕著な差が存在するとは言えない。

### (愛 情)

図-3に、「生き物をかわいがる」という項目に対する集計結果を示す。この愛情という領域は、他人へのいたわり、おもいやり、生物への愛情などによって質問が構成されているが、図-3に掲げた例だけでなく、すべての質問項目において、統計的に有意な発達傾向が見られる。

### (不機嫌)

図-4は、「思い通りにならないとき不機嫌になる」という項目に対する集計結果である。この「不機嫌」も、そこに含まれるほとんどの項目において、発達による差が統計的に有意であり、年齢が進むにつれて、「不機嫌」という感情が幼児において次第に表出されなくなると言える。

### (嫌 い)

この「嫌い」では、調査結果が2つのタイプに大別される。「嫌いな友だちがある」の場合は、

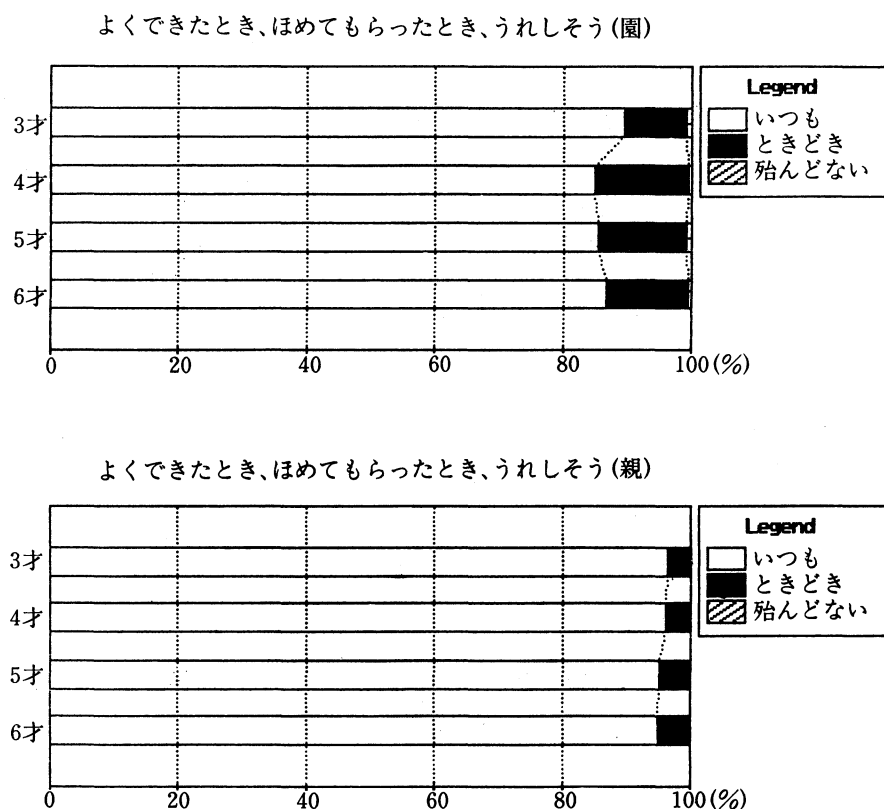
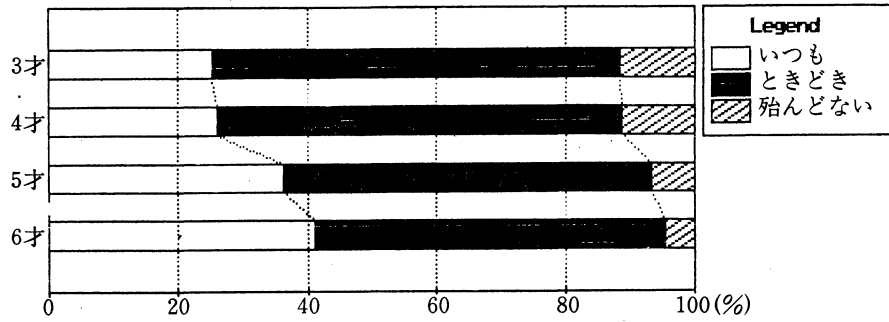


図-2 喜悦(よくできたとき、ほめてもらったとき、うれしそう)

生き物をかわいがる(園)



生き物をかわいがる(親)

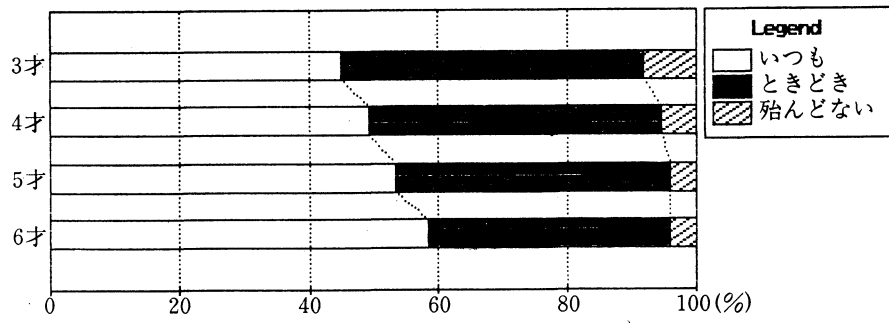
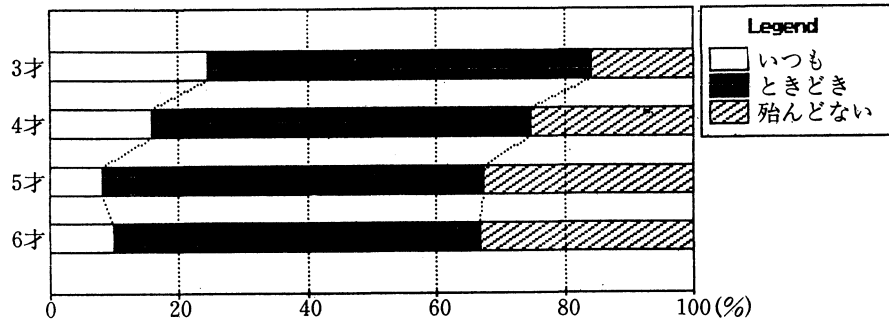


図-3 愛情 (生き物をかわいがる)

思い通りにならないとき、不機嫌(園)



思い通りにならないとき、不機嫌(親)

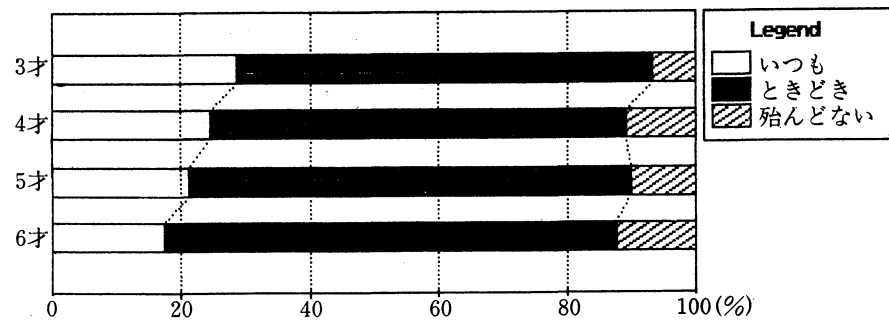


図-4 不機嫌 (思い通りにならないとき不機嫌になる)

それが増加する方向に、発達による差が見られたのに対し（園での場合、 $\chi^2=33.707$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ ）、「動物を嫌う」や「親や先生を嫌う」といった質問項目では、逆に、「嫌う」が減少する方向に発達に伴う差が有意である。図-5は、このうち前者の「嫌いな友だちがある」の結果である。

### （怒り）

「怒り」に関する質問項目の中で、「約束が守られないと怒る」だけが、年齢が進むにつれて、「怒り」が増大する傾向を示したが、他の項目は逆に、「怒り」が減少する傾向を示している。図-6は、「親や先生に対して気に入らないと怒る」の結果である。年齢が進むにしたがい、「ほとんどない」が有意に増大している（園での場合、 $\chi^2=39.547$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ ）。また、この場合、園の評定よりも親の評定において、より怒りやすくなっており（ $CR=20.11$ ,  $p<0.001$ ）、注目される。

### （恐怖）

質問項目では、動物、暗い所、一人でいること、知らない人、高い所、いじめる子、けがや病気など、いろいろなものに対する恐怖を調査したが、すべて、年齢が進むにしたがい、「恐怖」が減少する傾向を示している。ただ、図-7に示した「いじめる子をこわがる」場合は、「ほとんどない」が4歳でもっとも少なく、以後、増加する。

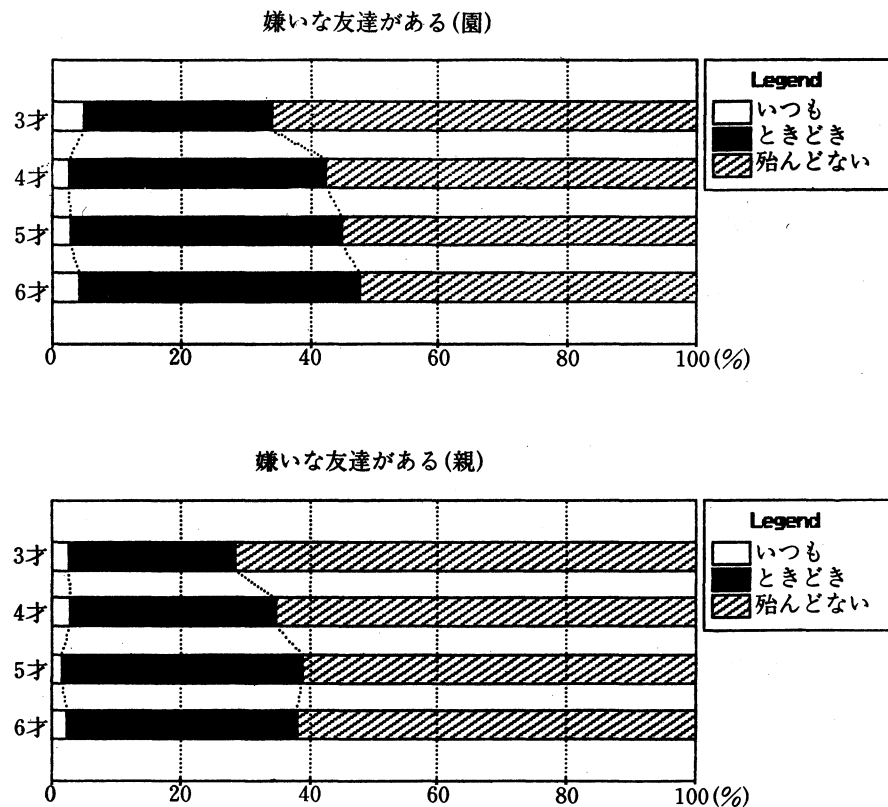
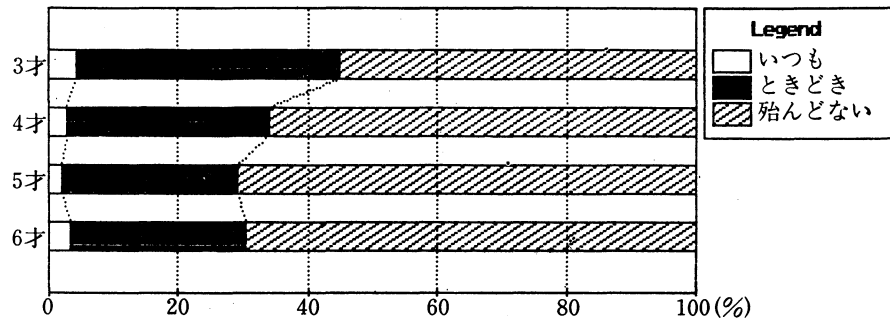


図-5 嫌い(嫌いな友だちがある)

親や先生に対して気に入らないと怒る(園)



親や先生に対して気に入らないと怒る(親)

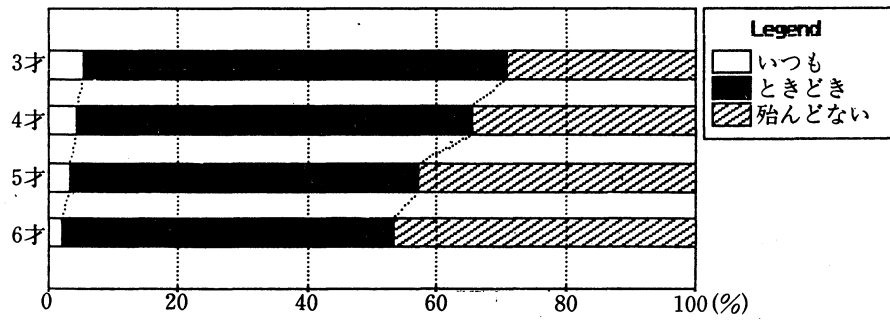
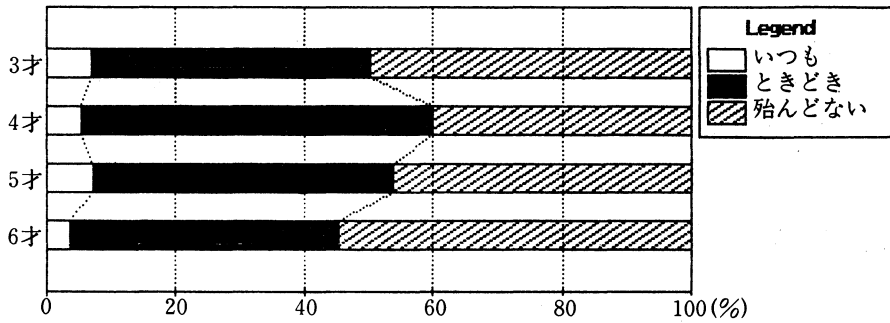


図-6 怒り(親や先生に対して気に入らないと怒る)

いじめる子を恐がる(園)



いじめる子を恐がる(親)

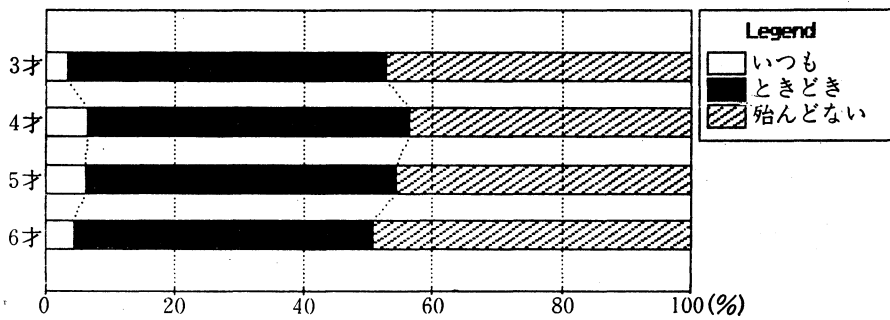


図-7 恐怖(いじめる子を恐がる)

## (過 敏)

図-8には、その代表として、「何か言われると、すぐびっくりする」をあげているが、このように、年齢による差はほとんどなく、これは、この領域の項目の大部分に共通している。

## (恥 ず かし がる)

図-9は、「人よりできないと、恥ずかしがる」の結果である。年齢が進むにつれて、「恥ずかしがる」比率は明らかに増大する(園での場合、 $\chi^2=101,236$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ )。他の項目でも同様であり、「恥ずかしがる」感情は、3歳児から6歳児にかけて次第に強くなると言える。

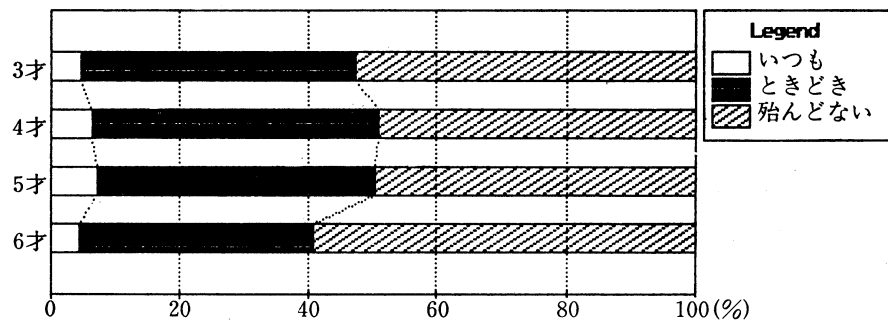
## (嫉 妬)

嫉妬の場合も、前述の「嫌い」と同様に、その嫉妬する中身の違いによって異なる結果を得た。図-10のように「人がかわいがられると嫉妬する」というのは、年齢が進むにつれて減少するが(園での場合、 $\chi^2=17.186$ ,  $df=6$ ,  $p<0.01$ )、一方、「他の子のほうが優れていると嫉妬する」では逆に年齢が進むにつれて嫉妬が強くなる傾向を示す。

## (く や し がる)

図-11には、「運動で人に負けるとくやしがる」の結果を示す。年齢が進むにつれて、くやしがる感情が次第に強くなる傾向を示している(園での場合、 $\chi^2=98.683$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ )。これは他の項目についても言え、くやしがる感情が、3歳から6歳にかけて発達すると考えられる。

何か言われると、すぐびっくりする(園)



何か言われると、すぐびっくりする(親)

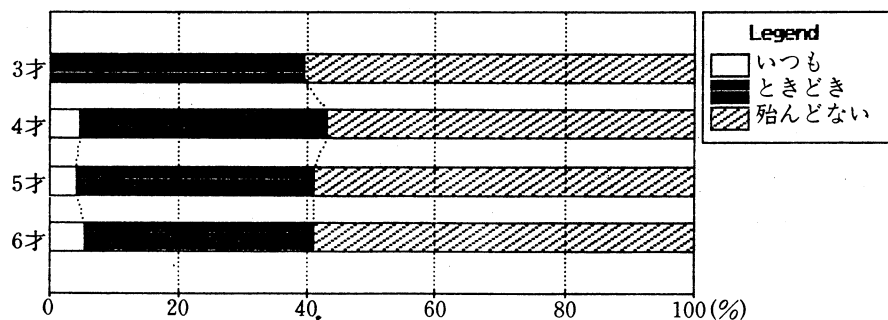
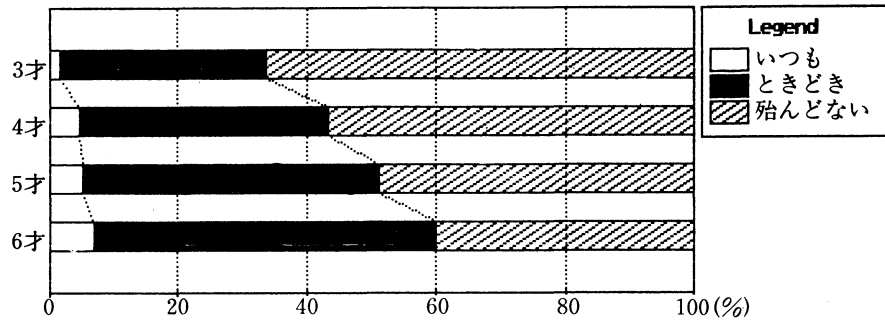


図-8 過敏 (何か言われると、すぐびっくりする)

人よりできないと恥ずかしがる(園)



人よりできないと恥ずかしがる(親)

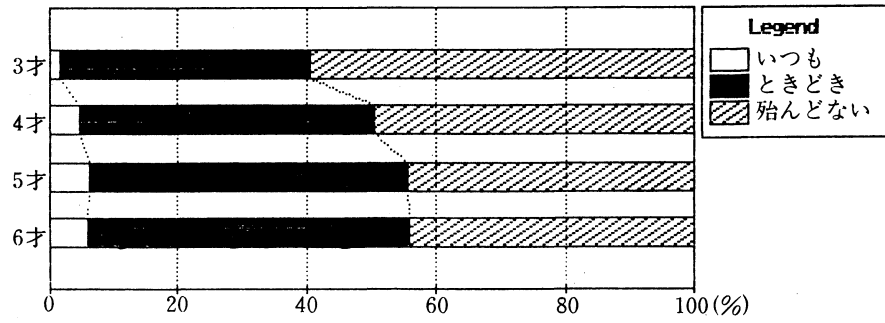
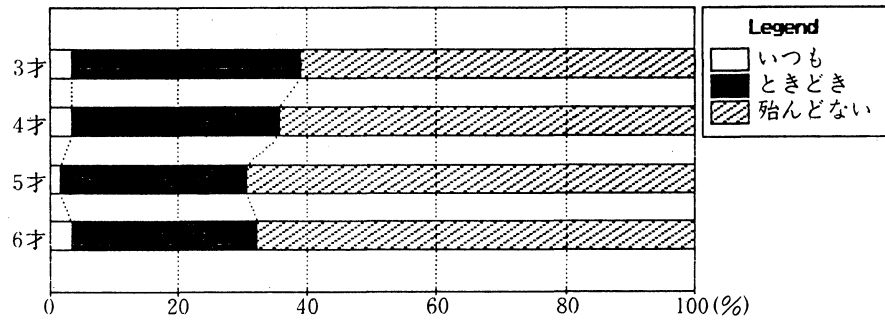


図-9 恥ずかしがる (人よりできないと恥ずかしがる)

人がかわいがられると嫉妬する(園)



人がかわいがられると嫉妬する(親)

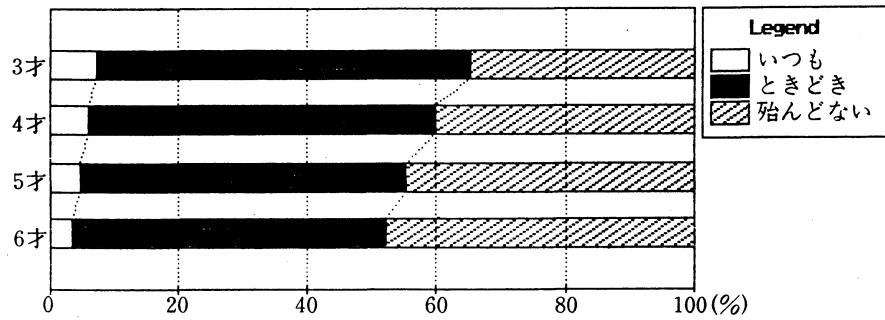
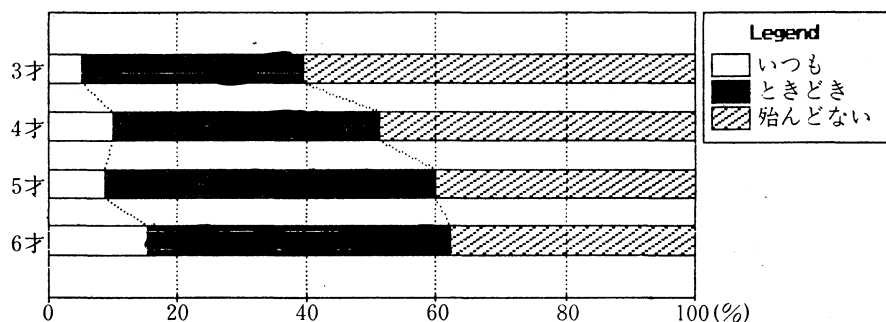


図-10 嫉妬 (人がかわいがられると嫉妬する)



運動で人に負けるとくやしがる(園)



運動で人に負けるとくやしがる(親)

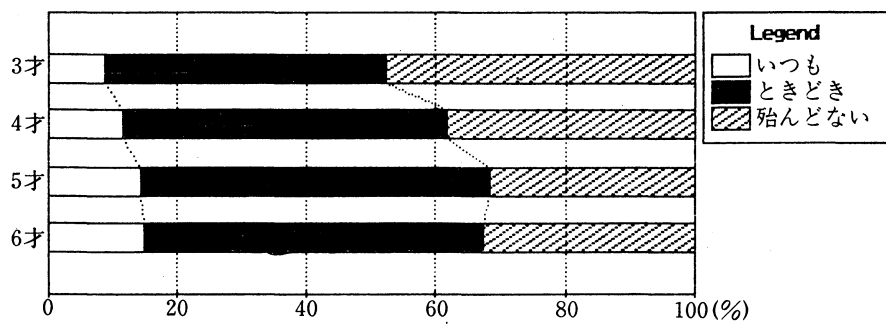


図-11 くやしがる(運動で人に負けるとくやしがる)

## (さびしがる)

図-12は「母親がいないときさびしがる」の結果である。年齢が進むにつれて、「ほとんどない」が増大し、「いつも」が減少する(園での場合、 $\chi^2=98.278$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ )。これは、「家で一人になるとさびしがる」でも、まったく同様の傾向を示す。ところが、「友達がいなくてさびしがる」では、まったく逆に、年齢が進むにつれて、「さびしがる」気持ちが強くなっている(園での場合、 $\chi^2=36.998$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ )。それを図-13に示した。

## (悲しがる)

質問項目のうち、「友達がいなくて悲しそう」と「母親が家にいないとき悲しそう」および「家で一人ぼっちのとき悲しそう」の3問については、前述の「さびしがる」と、それぞれまったく同じ傾向を示した。このような場面設定では、「さびしがる」と「悲しがる」を区別することは、難しいとも考えられる。その他の質問項目では、図-14の「しかられたとき悲しそう」のように、年齢による差がほとんど見られなかったものが多い。

## (よく泣く)

図-15に示したのは、「何か言われるとすぐ泣く、涙を流す」という項目である。年齢が進むにつれて、「ほとんどない」が有意に増加する(園での場合、 $\chi^2=109.647$ ,  $df=6$ ,  $p<0.001$ )。

## 2. 保育園・幼稚園での評価と親の評価

保育園・幼稚園の保育が行った評価と親が行った評価を比較すると、全体的にはかなり一致して